

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2 ミュージアムの収蔵品 47
爆弾三勇士の皿巻頭
つれづれ3 **「入館者70万人」に迎えた人々**
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学国際関係学部教授〕

館長だより

5 **医療倫理と医師のあり方**
立命館大学国際平和ミュージアム館長
高杉 巴彦ミニ企画展
特別展示7 **開催報告** (2010年4月～8月)ここが
見どころ8 **戦争展示の難しさ (2)**
—ファースタディへの誘い—
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
小関 素明〔立命館大学文学部教授〕運営委員
リレー連載9 **英語教育における平和教育**
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
赤沢 真世〔立命館大学スポーツ健康科学部准教授〕ミュージアム
おすすめの
一冊11 小貫雅男・伊藤恵子 著
『菜園家族21—分かちあいの世界へ—』(コモンズ 2008年刊)
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
藤岡 惇〔立命館大学経済学部教授〕

事業報告

12 **祝! 入館70万人達成**

- 2010年度特別展 カレル・チャペックの世界—文芸を通した平和と人間性の追求—
- 夏休み親子特別企画2010
- チャレンジ体験受け入れ・NGOワークショップ開催
- 無言館 京都館開設5周年記念 戦没画学生「戦場からの絵葉書」展
- 国際平和・人権連続セミナー
- ホームカミングデー関連企画

20

- ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 中野 恭子
- 平和へのメッセージ—常設展示見学者の感想—
- 2009年入館者状況(2009年4月～2010年3月)、編集後記
- ミュージアムインフォメーション



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

爆弾三勇士の皿



爆弾三勇士の皿

直径：11.2cm／深さ：2.7cm 年代：1932年～1945年頃
寄贈者：面手勝仁



参考：肉弾三勇士之像（お菓子のおまけとして付けられたもの）

この資料は陶器製の印版手の皿です。印版手とは型紙や版を使って模様をつける技法のことで、大量に同じ絵柄を作ることができます。

この皿に描かれているのは、長い筒を持つ三人の兵士（爆弾三勇士）と与謝野鉄幹が作詞した「爆弾三勇士の歌」の一部です。

「廟行鎮の敵の陣

我の友隊すでに攻む

折から凍る二月の

二十二日の午前五時

命令下る正面に

開け歩兵の突撃路

待ちかねたりと工兵の

誰れか後れをとるべきや

中にも進む一と組の

作江 北川 江下ら」（注1）

爆弾三勇士とは、1932年の上海事変において戦死した3人の陸軍兵士のことです。2月22日、3人は長さ2m程の竹の筒に火薬をつめ、敵陣の鉄条網まで運び、爆破して突破口を開く任務の最中に亡くなりました。

数日後、この3人は爆死して敵陣を破ることを志願した英雄として新聞で大きく取り上げられました。

すると直後から、感激した市民からお見舞金が届き、3人の絵を靖国神社に奉納したいという申し出があり、

映画化が決定します。新聞社は三勇士の歌を募集し、ラジオは特別番組を放送しました。その後、更に映画、芝居、浪曲、三勇士を称える本などが作られ、爆弾三勇士は一大ブームとなりました。この皿の製作年はわかっていませんが、こうした背景の下に作られたものでしょう。

三勇士ブームの背景には、美談を作り、ひろめたい陸軍の後押しがありました。そのため、報道で事実が変化したり、歌や映画が異常なスピードで作られました。最初の新聞報道では爆弾を身体に縛って突撃したことになっていましたが、その後、爆弾筒を運んだと改められました。歌や映画は3人が亡くなってから1ヶ月以内に公開されています。陸軍大臣や海軍大臣の言葉が添えられ、彼らを称える本が何冊も出版されました。三勇士は、おもちゃや日用品、着物の柄などにもなりました。

戦争の犠牲を美化しようとする軍と、美談に熱狂する国民の双方があって初めて成立した現象ではないでしょうか。

（学芸員 兼清順子）

注1：鉄幹の作詞は、正しくは

「…中にも進む一組の江下 北川 作江たち…」

注2：毎日新聞等では「爆弾三勇士」、朝日新聞等では「肉弾三勇士」と呼ばれた。

参考文献 青地辰 他著『人物昭和史・3 総力戦の人びと』（1978年、筑摩書房）

「入館者70万人」に迎えた人々

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学国際関係学部教授)

■『ガラスのうさぎ』の高木敏子さん

立命館大学国際平和ミュージアムは、2010年6月4日、常設展への参観者数が70万人を超えました。そして、まさにその日、小学生の参観者でにぎわうミュージアムに、東京大空襲の悲劇を描いた『ガラスのうさぎ』の作者として知られる童話作家の高木敏子さんが友人とともに東京から訪れました。

『ガラスのうさぎ』は国内でも240万部の大ベストセラー、現在9種類の言語（日本語・ドイツ語・英語・タイ語・ベンガル語・中国語・マラティー語・スペイン語・ハンガリー語・ポルトガル語）に翻訳されて世界各地に普及されています。アラビア語とフランス語への翻訳も進行中ですが、意外なことにお隣の国・韓国語版も未刊、現在準備中です。高木さんは、1978年には厚生省児童福祉文化奨励賞、1979年には日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞されましたが、2005年にはエイボン女性大賞も受賞されました。

国際平和ミュージアムの2階展示スペースには、高木さんの作品や直筆原稿などの展示コーナーがあります。このコーナーの開設以来、高木さんは折に触れて立命館大学を訪ね、ある時はミュージアムを訪れている若い来館者に、また、ある時は平和学を学ぶ学生たちに熱く語りかけてきました。満州事変の翌年(1932年)に東京下町（実は私と同じ町）でお生まれになったので、世間的に言えば「喜寿を過ぎた後期高齢者」ですが、話し始めると鉄砲玉のようにガンガン突っ走ります。「私、もうダメ。これが最後」とおっしゃりながら、次はどんな季節に京都を訪問したいか、いつも心の中に期待を絶やしません。今回は6月の宇治の里を訪れ、平等院や源氏物語ミュージアムを参観され、

緑豊かな季節を楽しめました。

2009年2月に金の星社から出版された『『ガラスのうさぎ』：未来への伝言—平和の語り部 高木敏子の軌跡』はとても美しい本で、ダークダックス、長山藍子、小山内美江子、澤地久枝などの方々も特別寄稿しています。しかも、立命館大学国際平和ミュージアムの「高木敏子コーナー」についても4頁に渡って写真つきで丁寧に解説されており、おまけに私が書いた「下町どうし、阿吽の響き合い」というエッセイまで掲載されています。ミュージアムの「高木敏子コーナー」はこうした新しい訳本や解説本が出版されるたびに、著者ご本人からお知らせを頂いて改良してきたので、この種のコーナーとしては珍しく、なお「作者とともに生きているコーナー」なのです。

■映画プロデューサー・益田裕美子さん

私が担当する「国際協力論特論」の講師として、プロデューサーの益田裕美子さん（株式会社平成プロジェクト社長）にお出まし頂きました。益田さんは岐阜県出身で、1983年、金城学院大学在学中の研究『高齢者用商品開発への提言』が「商品研究大賞」を受賞、1985年には「通産省エネルギー大賞優秀賞」を受賞されました。大学卒業後はNHKのラジオやニュース番組等のプロデューサーとして活躍されましたが、2000年には日本・イラン合作映画『風の絨毯』（監督：カマル・タブリージー、2003年日本公開）をプロデュース、その後も、2003年には『イランからのラブレター』、2006年には長編ドキュメンタリー映画『平成職人の挑戦』、2008年には『甦る玉虫厨子—時空を超えた「技」の継承』、2009年には『築城せよ!』な



『ガラスのうさぎ』の高木敏子さん（右から3人目）



映画プロデューサー・益田裕美子さん

どを次々とプロデュースしています。『風の絨毯』は、一枚のペルシャ絨毯が結ぶ飛騨高山とイランの関係を描きつつ、そこに幼く淡い恋の物語を重ね合わせた映画で、榎本孝明さんが出演しています。『平成職人の挑戦』は、『風の絨毯』の中で描こうと思いながら描けなかった益田さんの無念を独立のテーマとして主題化したドキュメンタリー作品で、日本の三大美祭といわれる飛騨高山祭の豪華な祭山車の宮大工の名工12人の仕事を追いながら、伝統技術を守りつつ継承者を育て、大仕事を完成させていく姿を描いた作品です。

国際協力論特論の授業で、益田さんは『風の絨毯』をイランとの共同で制作する過程で、イラン側との契約締結にどんな思いもかけない緊急事態が発生したか、それを奇想天外の交渉力でどのように克服したかについて、体験をふまえながら生き生きと語りかけました。原点には、たとえ不測の事態が発生しても、自分が一緒に仕事を担っている人たちの生活をどう守り抜くかという強い意志と、それを迷いなく貫き通すための迅速で、常識に囚われない、強烈な実行力と決断力があるようです。益田さんはアフガニスタンでの映像製作の尋常でない苦労についても紹介しましたが、受講生たちは、困難に直面してもめげずに、粘り強く、解決への道を切り拓いていく益田流の生き方に感動を受けたようでした。

益田さんは、誰とであれ、約束したことは必ず果たすために最大限の努力を惜しまないことを信条にしているようです。その真剣さこそ、益田さんと関わる人々の心をつかみ、一緒にプロジェクトを担う共同の力を生み出すエネルギーを引き出しているように感じます。平和は理論だけでは創り出せません。困難に立ち向かい、それを克服していくために自分に何ができるかを主体的に考え、実行する意思をもち、そのために必要な力量を備えなければなりません。益田さんの生々しい実践報告は、国際社会を舞台に羽ばたく学生たちに良い刺激を与えたように思います。

■ 東京学芸大学准教授・李修京さん

私は、20年来住んでいる宇治の地元で、「詩人尹東柱（ユンドンジュ）記念碑建立委員会」の共同代表を務めています。7月8日、この委員会の活動を支えている研究者の一人である李修京（イスギョン）東京学芸大学准教授が、平和ミュージアムを訪れました。

尹東柱（1917年12月30日～1945年2月16日）は韓国では英雄的詩人として知られています。1942年4月、父親の勧めで日本に留学し、立教大学文学部で学んだ後、同年10月、同志社大学文学部に入学しました。翌1943年7月14日、在学中に治安維持法違反の疑いで下鴨警察署に逮捕されましたが、同じ下宿に住んでいた従兄弟の宋夢奎（ソンモンギョ）も逮捕されています。友人と、朝鮮人の懲役や民族文化の圧迫、朝鮮

の独立などについて語ったりしたことが、「国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ其ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタルモノナリ」と解釈され、京都地方裁判所で「治安維持法違反により懲役2年」の判決を受けました。やがて福岡刑務所に収監された尹東柱は、1945年2月16日に獄死しましたが、獄中で度々注射を打たれていたこともあり、「毒殺」を疑う説もあります。実は宋夢奎も同じ福岡刑務所に収監され、同年3月10日に獄死しています。

尹東柱が生前の姿を最後に残しているのは宇治の天ヶ瀬溪谷であり、その写真が残されていることもあり、私たちは尹東柱の記念碑を京都府宇治市内の公園に建立したいと考え、府に要請してきました。実は、京都府も人権学習の一環として、あの戦争の時代、日本の抑圧的な朝鮮政策の下で、母国語で詩を詠むことさえ許されなかった尹東柱の話が取り上げられているのですが、こと記念碑建立については「地元とのゆかりが希薄」として否定的な立場をとっています。そこで私たちは、尹東柱と宇治市とのゆかりを示す史料を探そうと関係方面に尹東柱に関する歴史的な資料の開示を求めました。結局、記念碑建立委員会の申し入れに応じて京都府地方検察庁が関係資料を調査し、「判決文」が残されていたとして私たちへの閲覧が認められました。李修京さんはこの資料の閲覧が許可された日に、わざわざ東京からやって来たのです。

李さんは立命館大学大学院国際関係研究科の修士課程で私のゼミに所属していました。フランスのアンリ・バルビュスが提起した反戦文学運動「クラルテ」が、当時の帝国主義日本や植民地朝鮮にどのように伝えられたかを研究していましたが、この問題に関連して、国際平和ミュージアムも関わって国際シンポジウムを開いたこともありました。

ここに紹介した3人の人々は、それぞれの立場で立命館と縁を結び、平和ミュージアムと出会いました。ミュージアムは、今後とも、多様な縁を培いながら裾野を広げ、根を張っていきたいと念じています。



東京学芸大学准教授・李修京さん

医療倫理と医師のあり方

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 高杉巴彦

■ 医療倫理問題

交際相手の女性を流産させた医師が、不同意堕胎罪で有罪となりました。医師の立場を悪用した卑劣な犯罪で倫理以前の問題ですが、今日、特に先進医療を中心に医療倫理の問題が広く議論される時代となっています。たとえば臓器移植をめぐる「脳死」概念の理解に基づく臓器提供の「意思」が問題であり、2010年7月17日から、15歳未満の者からの臓器提供が家族の承諾のみで可能となりましたが、「脳死」＝「人の死」と判定することへの強い懐疑は残ったままです。また、遺伝子診断や体外受精など先端医療技術のありようや、「尊厳死」の議論、患者側の納得合意を得るインフォームド・コンセントや、さらには医療機関の配置やあり方まで、「医療倫理」と関わる問題が大きく課題となっています。

現代における医学・生命科学と医療の進歩の中で、生命操作についての倫理性、患者側への人間尊重が問われ、医療従事者の倫理性や人間性にかかわる問題として、現実の医療現場で具体的に生起する事例研究課題が数多くあります。

また今日、医者専門科や地域の偏りから「医師不足」が叫ばれ、さらに救急医療体制の不備も指摘されています。これも広い意味では、「医療倫理」と医療体制が絡む現象でしょう。発展途上国の医療体制未整備からくる「平和」でない状況＝「構造的暴力」とは異なる、先進国における医療制度の課題は、アメリカの医療制度問題でオバマ大統領が苦労していることでもあります。

■ 中野信夫さんのこと

立命館大学国際平和ミュージアムの「中野記念ホー

ル」は、眼科医中野信夫さんの名に因んでいます。1992年の当ミュージアム創設に際して多大な財政支援を寄せられ、世界唯一の大学立の総合的平和博物館としての当館の開設に、重要な貢献をなさいました。その中野さんは、2010年1月に数え歳百歳で亡くなりました。

専門の眼科医療分野での功績とともに、戦前、無産者診療運動と『医療と社会』誌の編集・発行に携わり、長年にわたって市民のための医療と医療制度の発展に尽力され、保険医療制度に貢献され、全国保険医団体連合会会長も務められました。

中野さんは、自らのビルマでの従軍体験もふまえて、反戦・平和の市民活動にも大きな足跡を残され、1981年からの「平和のための京都の戦争展」運動の発展にも尽くされました。当ミュージアムは、「平和と民主主義」を教学理念としてきた立命館大学のイニシアティブと、長年の「戦争展運動」の成果が、結び合って実現したものです。

現代の先端医療にかかわる「医療倫理」とは異なりますが、人間が自然な「生」をどう有意義に過ごし、「能力を開花させ」、どのように深い人生として全うして死んでいくかは、まさに「医療倫理」の基本であり、「平和」の本源的課題でもあるでしょう。まさに中野さんの人生の中に、それを見る思いがします。

■ わが父のこと

私ごとになりますが、2010年7月に私の父が亡くなりました。数え歳で94歳でした。

父は、山口県萩市の出身で、1939年に歯科医師の資格を習得後、職を得ますが、その後医師への希望を捨てがたく、資金もないため国費で学べる「満州国立

大学龍井開拓医学院」に入学しました。この開拓医学院は、1940年に^{ハルビン}哈爾濱医科大学や龍井、^{チチハル}齊々哈爾などの各地につくられた、医療業務経験者を対象にした医師養成機関でした。そこでの目的は、「開拓医学院は満州帝国国立にして^{キョウコ}鞏固なる国民精神を修練し、医学に関する高度の理論及び實際を習得せしめ開拓地に活躍する医師を養成」とあり、「満蒙開拓団」の開拓地等の医療・保健を担当する医師を養成するものでした。

開拓地は気候、風土、水、その他生活環境は極度に悪く、各種伝染病の発生も多く、入植者から医療従事者の赴任を望む声が強かったわけで、当初は内地から医師を満州に赴任させていましたが少数にとどまり、そのうちほとんど応召され、医師を求めることは困難となっていて、こうした制度を設けたのです。

開拓医学院では、「開拓魂注入」ということで、大地耕作や軍事教練とともに、夏季休暇中に開拓団地へ分散して衛生保健指導と「開拓地研究」が行われ、「開拓地に活躍する」僻地の地での医師としての教育を徹底されたのでした。

そこを卒業後、医師となった私の父は、故郷の萩市から母親と新婚の妻を同行し、^{ハルビン}哈爾濱郊外、北東129kmの「濱江省（現黒龍江省）巴彥県」に着任し、病院勤務を行っていました。しかし間もなく日本が敗戦し関東軍はすでに逃走。ソ連軍の侵攻で、若い男性が連行される事態となりましたが、秋から中国共産軍が進駐。残った開拓団員に高粱と大豆が配給され、代わりに父は医師として徴用されて、母とともに中国に残され、その間、祖母は現地で病死となり、私が「巴彥」県の現地で生まれました。

やっとの思いで日本に引揚げ、父は日本国の医師資格を獲得し、東京に出て病院勤務の後、新宿区で開業。約40年間活動してきました。晩年開業医を廃業後、京都に移住するも、各地の無医村より招聘があり、長崎県五島列島の無医村島の医師として5年間赴任。診療所を黒字にし、老人憩いの家もつくるなどしました。

父の医師としての養成のされ方は、「満州国」経営と「満蒙開拓団」設営に組み込まれて、その一端担うことでもありましたが、同時に「貧乏学生」にとっての展開の可能性を持ち、「医療とは何か」「地域住民に奉仕し、寄与する医師としてのあり方」「医療倫理」を徹底して鍛えられることでもありました。新宿区での開業医時代にも、他の医師が怖がって行かない「ドヤ街」への往診を、まだ小学低学年の私を自転車に乗せていったものでした。患者の側の生き様に即した生活指導を含めての診療・治療や、無医村における終末医療の「看取り方」など、「医療倫理」を考慮した診療をしていたように、わが子として今更ながら思うこの頃です。

■「医療倫理」教育のこと

「医療倫理」問題は先端医療に伴ってのことにも見えますが、「医療倫理」の徹底は、かえって中野信夫さんや父のような時代の中であって、市民のための医療に徹する場面で培われることでもありました。現在「持続可能な平和な地球社会」を創っていく営みを考えた時に、「医療倫理」の原点は、医療問題に限定するのではなく、地球市民としての「人間教育」が根幹に必要でしょう。

北海道で開校した立命館慶祥中学・高等学校で、私は「医歯薬進学講座」を開設しました。もちろん医学部等への進学学習を行うのですが、それだけではなく、北海道医師会と連携して医師による「地域医療」「医師としての適性」「手術見学」「医療倫理」などの講座を実施しました。これはエリート意識の強い現在の国立医大生の実態を見た時に、医師になろうとする人間に必須の学習要件だと気付いたからです。

「医療倫理」をめぐる事件を考えたとき、中野さんや父の生きかたを現代青年に適用していくとすれば、専門力量形成だけでなく、その基盤としての「地球市民力」「平和創造力」の形成が必要ではないでしょうか。

開催報告

(2010年4月～8月)

今号では2010年4月から8月の間に開催しました企画展示をご紹介します。

第55回ミニ企画 「フィリピン写真展～Be Philippine!!!～」

2010年4月6日(火)～4月25日(日)ミニ企画展示室

BEPPINEは、立命館大学の学生を中心とした国際協力団体です。滋賀県の甲賀市国際交流協会と共に、フィリピン・ギマラス島のシンカラン村という小さな漁村で交流・支援活動を行い、これまでに幼稚園の再建活動、浄水及び貯水装置設置活動、エコプロジェクトなどに取り組んでいます。



「フィリピン写真展～Be Philippine!!!～」
学生の心がこもった展示を見つめる見学者

都会・田舎・美しい自然・貧富の現状など、様々な顔を持ち、年々変化するフィリピンの多面性を本展で紹介し、学生が現地で考えたこと、感じたことを来館者に共有していただくことでフィリピンを知り・考えるきっかけになればと願い展示を行いました。

第56回ミニ企画 「ミュージアムこの1てん 児童愛護週間ポスター」

2010年5月2日(日)～5月23日(日)ミニ企画展示室

現在5月には児童福祉週間があります。1930～40年代にはこの時期、「児童愛護週間」が実施されていました。今回は、1938年から1942年頃に群馬県の児童愛護週間の宣伝用に制作されたポスターを展示しました。

児童愛護は一見すると現在に通じる児童福祉政策のようですが、この時期の日本の厚生事業は、国民を資源としてとらえ、戦略的に保護・育成することを目的としていました。このポスターを通じて、昔と今の「子ども観」を知るきっかけになればと願い、時代ごとの子どもの発育に関するデータなども併せて展示を行いました。



「ミュージアムこの1てん 児童愛護週間ポスター」展示資料

第57回ミニ企画「ラジオ体操の歴史」

2010年7月17日(土)～8月29日(日)ミニ企画展示室

ラジオ体操の音楽をきくと、懐かしさとともに身体が動いてしまう人もいるのではないのでしょうか？

1928年に始まったラジオ体操は、体育講演会や学校行事などを通じてすぐに全国に普及しました。また、1930年に「ラジオ体操の会」ができるとラジオ体操は夏の風物詩となりました。

しかし、総力戦体制の本格化にともない、ラジオ体操の目的は当初の健康保持から、国のために強い体を作ることへ変わっていきました。また、日本の植民地や占領地でもラジオ体操はひろく実施されていました。

本展では、約40点の実物資料の展示や、歴代のラジオ体操伴奏曲の演奏を通して、ラジオ体操の歴史を紹介しました。会場では時々、音楽に合わせてラジオ体操をしてしまう方の姿も見うけられました。

(本文では「ラジオ」の表記を用いました)



「ラジオ体操の歴史」展示資料

【特別展示】 「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター展 - HIROSHIMA NAGASAKI Atomic Bomb Photo Poster-」

2010年4月7日(水)～5月26日(水) 中野記念ホール

ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスターは、広島市と長崎市が共同制作したポスターです。

戦争や被爆体験の継承が大きな課題になっている現在、その実相を知っていただくため、立命館大学国際平和ミュージアムでポスター展を開催しました。展示期間中、ポスターを一人静かに見つめる姿、グループ内で話し合いながら見学を進める修学旅行生などの姿も見られ、多くの方に見学いただくことができました。



「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター展」
ボランティアガイドと共に見学する
団体見学の生徒たち

戦争展示の難しさ (2)

ーファースタディへの誘いー

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 小関 素明

(立命館大学文学部教授)

戦争というのは本質的に不条理な行為です。ではなぜそうした不条理な戦争が引き起こされたのでしょうか。一部軍人の陰謀ないし暴挙の結果として説明してしまったのでは、話は分かりやすくはなりますが、あまり意味はありません。一方、そうした説明や国際交渉や外交の場で衝にあたった当事者の「判断ミス」といった見方を排して、当時の国内状況や国際環境と関連づけて戦争の勃発した原因を深く掘り下げていけば、戦争原因のより構造的な分析に近づけるかに見える反面、戦争への道すじをある種「避けようのなかった選択の累積的帰結」、すなわち戦争必然史観のように描いてしまいかねません。まさに悩ましいジレンマです。前回の「戦争展示の難しさ (1)」では、戦争展示に真摯に向き合おうとすればするほど、このジレンマに直面せざるを得ないことに触れました。

ではこのジレンマにわれわれはどう向き合えばいいのでしょうか。「テーマ1 一五年戦争」の「1. 軍隊と兵士」のコーナーにつづく「2. 国民総動員」のコーナーの展示にはこのジレンマから脱するためのヒントがあります。このコーナーでは、戦争は多くの国民の「協力」を取り付けて遂行されたことがさまざまな局面において再確認されています。国家は、教育を初めとしたチャンネルを通して、国民を洗脳し、また幻想を与えました。「戦争協力体制」のコーナーに展示されている『臣民の道』や青年団関係の資料は国民を巧妙に誘導したり、抵抗や不満を事前に封じる手段や装置が随所に用意され、国民を取り巻いていたことを示しています。

それは国民に犠牲や忍従を強いる一方で、国民を幻想に駆り立てました。「国民のくらし」のコーナーに展示されている戦時国債、国防献金への感謝状、勤労奉仕への出頭命令書、戦時色に染まった子供の文化・あそび(かるた・すごろく・ぬりえ・少年雑誌)などは国民が戦争への「協力」を引き出され、戦争を是とする価値観に染め上げられていった当時の様相を彷彿とさせます。要するにこのコーナーでは戦争を一部の要路者の所為とだけ見なさず、国民すべてが関与した行為とみなすことの重要性が再確認されていると言っていいでしょう。そもそも戦争の原因を尋ねること自体、戦争責任の所在をどう考えるかという問題と切り離すことはできません。したがって、大規模な戦争の遂行

が可能になった理由に多くの国民の「協力」や関与を求めることは極めて妥当であり、また必要なことです。

しかし、ここでわれわれはまた新たな疑問に行き当たらざるを得ません。国民がさまざまな意味での戦争の被害者であるというのは疑問の余地はありません。しかし他方で、加害者であるというのは、はたしてどの程度そう言えるのでしょうか。国民の中には他のアジア諸国を見下す心情から、ないしは日本が西欧諸国に包囲されているという「危機感」から積極的、自発的に戦争に協力した人もいたでしょうし、「聖戦」のスローガンに幻惑されて「善意」のつもりで戦争を支持した人もいたでしょう。また内心協力したくなくとも、権力の強要によって不本意ながら「支援」を余儀なくされた人もまた多くいたでしょう。そうした多様な意識を抱いていた国民に一律に戦争責任を求めると言うことは困難と言わざるを得ません。

では、しょせん国民はだまされたり洗脳されていたに過ぎず、それに対して戦争責任を認めることは当を得たものではないのでしょうか。知るべき情報から遮断されていたため適確な判断ができなかった、また戦争批判を表明する自由を奪われていたということは否定できないにせよ、そのことをもって国民の戦争責任を全面的に免除すれば、結局、政策決定過程に関与した一部の戦争指導者たちに全面的に責任を負わせる以外にはなくなります。その結果、特に戦争を直接体験していない戦後世代は、戦争に対する当事者意識を今以上に持ち得なくなることは間違いないでしょう。

では国民が戦争に対して「当事者意識」を持つことは、望むべくもないことなのでしょうか。この疑問を胸に、今一度「2. 国民総動員」のコーナーに展示されている上記の資料を眺めてみましょう。そこで改めて目にとまるのは、当時の国民の意識を戦争協力の鋳型にはめたものの痕跡です。しかし、その意識の実態を直接指し示すものは特にないことに気づかざるを得ないでしょう。

戦争を知らない世代が「当事者意識」を持つということは、この疑問を反復し、簡単に割り切った「答え」を出さない事にこそあるのではないのでしょうか。皆さんのファースタディ(そこから先の探求)を期待して止まない当館の基本姿勢を読み取っていただければ幸いです。

英語教育における平和教育

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 赤沢 真世

(立命館大学スポーツ健康科学部准教授)

はじめに

突然ですが、学校教育において実践される平和教育と聞くと、みなさんはどんな教科を連想されるでしょうか。もちろん、近年では「総合的な学習の時間」のなかで戦争学習・平和学習が行われたり、平和学習の一環として、広島や長崎、沖縄への修学旅行が行われていたりしますので、平和教育が教科横断的なテーマであることは言うまでもありません。では、あえて平和学習を扱う「教科」とは？と尋ねられれば、どうでしょうか。きっと、歴史として戦争を扱う社会科や、「一つの花」や「ちいちゃんのかげおくり」などの戦争文学作品を扱う国語科が挙げられるかと思います。

私はここで、「英語科」という教科を挙げたいと思います。実は、英語科においても、平和教育を位置づけた実践が行われてきました。たとえば高等学校の教科書には、キング牧師の「I have a dream」をはじめとして、地雷の問題やアマゾンの環境破壊など、人権や戦争、環境問題といった平和に関するテーマが多く掲載されています。そこで、リレー連載の機会をいただきました今回は、英語教育を平和教育という観点から考えてみたいと思います。

印象的な教材

私の専門分野は「教育方法学」という分野で、主に学校教育を対象として、カリキュラムや教材、指導方法や評価といった側面について研究しています。とりわけ、小学校外国語活動や中・高等学校の英語教育に関心を持っています。

これまで色々と学んできたなかで、私は常に次のよ

うな思いを抱いております。それは、英語教育、あるいはもっと大きな視点から「ことばの教育」においては、「コミュニケーションのスキルを身につけること」だけが目的であって良いのか、いや、違う」という思いです。そのような中で出会ったのが次のような教材「We can stand」だったのでした。

これは、水俣病が正式に「公害病」として認定される以前に胎児性水俣病患者として生まれ、生きた、松永久美子さんを詠った詩（曲）です。

Gate 23

文化・歌

We Can Stand

Words by Nagano Keiko / Music by Kurosaka Masafumi

We can stand. We can sit. We can walk. We can run. We can speak. We can see. We can hear. We can think. We can throw a ball. We can write letters. We can read a book. We can sing a song. But she cannot stand. Look at this picture. This girl is Miss Kumiko Matsunaga. She is twenty-one years old. She weighs only fifteen kilograms. She is a victim of the Minamata disease. She cannot stand. She cannot sit. She cannot walk. She cannot run. She cannot speak. She cannot see. She cannot hear. She cannot think. She cannot throw a ball. She cannot write letters. She cannot read a book. She cannot sing a song. She can only ... She can only cry ... She can only cry ... cry and sleep. Do you know the Minamata disease?	私たちは立てる 座ることができる 歩ける 走ることができる 私たちは話せる 見ることができる 聞ける 考えることができる ボールを投げられる 文字を書ける 本を読める 歌を歌える しかしこの人は立てない この写真を見て この少女は 松永久美子さん 21歳です たったの15キログラム 水俣病の犠牲者 松永久美子さんは 立てない 座れない 歩けない 走れない 話せない 見えない 聞けない 考えられない ボールを投げられない 文字を書けない 本が読めない 歌を歌えない できるのは ただ うめくだけ ただ うめいて うめいて眠るだけ あなたは 水俣病を 知っていますか (訳 阿牛)
---	---



松永久美子さん

60

出典：阿原成光『大学英語超入門 やればできる、誰だって！』三友社出版、2005年、p.60

私たちは当たり前のように立つことができる。歩くことができる。考えることができる。しかし、彼女は立つことも、歩くことも、考えることも、歌うこともできない。ただできるのはうめくことだけ。

授業においては、この教材を自主教材として、「can / cannot」の学習を行います。この教材は次の2点において私を惹きつけました。第一に、単なる「文法事項」の「Can / Cannot」としてしか考えていなかった「できる／できない」が、これほどまでに深く豊かな意味を持つことに気づき、衝撃を受けたのです。ことばというのは、人間の生活、そして生そのものと深く結び付いていることを改めて感じ、ともすれば技術に一面化されてしまう英語教育に対する強い危機感を抱いたのです。

そして第二に、戦争や環境破壊が自分にとって極めて身近な話であることを改めて認識したことです。これまで私が接してきた平和教材は、どこか「他の国の話」「昔の話」という印象でした。あるいは、「平和学習＝戦争学習」と一面的にとらえ、私たちの身近なところにも様々な障壁に苦しむ人々が多く存在している現実を目を向けていませんでした。しかしながらこの教材は、まさしく私たちの暮らす日本で起こった公害について目を向けさせるものであり、同時に、学習している子どもたちには同年代の女性のありのままの生を感じさせるものなのです。

こうした実践は、新英語教育研究会（設立1959年）を主軸として、日本の英語教育において展開されてきました。平和・人権・環境という視点に立ち、こうした自主教材の開発や「ピースメッセージ」の交流（1980年代から行われているもので、生徒が平和についての意見をカードに書き、修学旅行で広島を訪れた際に、海外からの観光客に渡ししながら意見交流を行うもの）などが行われ、活動は広がっています。

（「We can stand」を教材とした実践については阿原成光『大学英語超入門』（三友社出版、2009年）や阿原成光『お祭り英語楽習入門ーいじめは授業でなくす』（三友社出版、2007年）を参照されたい。新英語教育研究会の理論と実践については、例えば新英語教育研究会『新しい英語教育の創造ー21世紀に生きるその理論と実践』（三友社出版、2009年）がある。）

■ 平和教育という視点から英語教育を問い直す

2008年3月に告示された新学習指導要領では、小学校高学年に週一回の外国語活動が導入されることとなりました。また、中学校、高等学校においても、英語科の目標として「コミュニケーション能力の育成」が引き続き掲げられ、子どもの「生活場面」に即した英語学習が強調されています。しかし、お店での買い物や道案内をする際の表現はもちろん大切ですが、はたしてそこで扱われる子供の生活場面とは、彼らがまさに生きている生活や真実をどれほどまでに捉えるものなのでしょうか。また、グローバル化の進展に伴って、英語科を通して世界に「発信する」日本人の育成がうたわれるなか、日本人として「何を」発信すべきなのでしょうか。

このように、人間を育てる学校教育のなかにおいて、英語教育は何を目的とし、どんな内容を扱うべきなのかを、私たちは今一度考える必要性があります。平和教育の視点から改めて学校教育、教育課程を問い直すことが今求められているのではないのでしょうか。

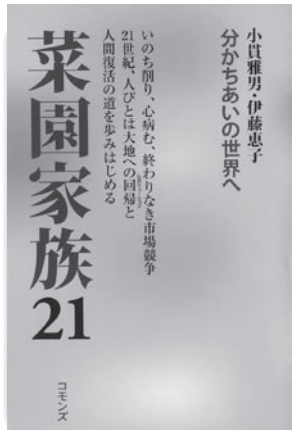
『菜園家族21—分かちあいの世界へ—』

小貫雅男・伊藤恵子著（コモンズ 2008年刊）

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 藤岡 惇

（立命館大学経済学部教授）



本書の原型をなす書物と評者が最初に出会ったのは、沖縄は石垣島の隣の竹富島の喜宝院であった。先般亡くなられた岡部伊都子さんが一時は永住を決意され、島の子供たちのために「こぶし文庫」を遺贈されたところだ。寝たきり老人ゼロの長寿と「うつぐみ（協働）」の竹富島こそ、私にはブータン王国やコスタリカ・デ

ンマークと並ぶ「深部から平和を実現したモデル地域」のように思われた。心臓マヒから生還できた後に、人口340人のこの島に足しげく通うようになったのはそのためである。

日本最西端の仏教寺院に併設されるかたちで、島の文化センター・展示施設である「喜宝院蒐集館」がある。平和な生き方を探究する場だという意味において、この施設は「ピース・ミュージアム」と呼べるところであるが、そこの売店に、本書の原型をなす小貫雅男『週休五日制による三世代「菜園家族」酔夢譚』（映像地域学研究会、2000年）という本が平積みされていた。「すごい本だよ」と説く上勢頭芳徳館長の語りに誘われて、読みだしたのが発端であった。「深部から平和な社会」というのは、人間の自然・大地からの分離を前提にした都市化社会・産業化社会のうえに築くことはできない、と小貫さんは説く。逆に人間の自然・大地との再結合、命を育む家族の再生のうえに築かれるべきであり、そのためには週休5日制のような労働時間の大幅短縮が絶対要件となると説いているのである。

小貫さんは教え子の伊藤恵子さんとともに、モンゴルの牧畜民の移動集落に住みつき、その体験を「四季・放牧」という映画に仕上げられ、全国で上映行脚を行われていたが、その一環として竹富島でも上映会をされ、上勢頭館長と懇意になられたこと、滋賀県立大学を退職された後は、彦根の山奥に「里山研究庵ノマド」を開設され、あるべき未来社会についての探求を深められていることも分かってきた。

「人間を失業させるのではなく、エネルギーを失業させる時代」、「モノづくりは市場に外注しても大過はないとしても、人づくりの柱は愛情と手作り」にあり、「半農半Xのライフスタイルこそが、ヒトの生き方の理想だ」という方向へと、時代は明らかに転換しつつある。小貫さんの『酔夢譚』は、時代の追い風を受けて、『菜園家族レボリューション』（社会思想社・現代教養文庫、2001年）、『森と海を結ぶ菜園家族—21世紀の未来社会論—』（人文書院、2004年）となり、ついに『菜園家族21』という形にまで発展をとげたわけだ。

「いのち削り、心病む、終わりのなき市場競争。21世紀、人びとは大地への回^{レボリューション}帰と人間復活の道を歩みはじめる」というサブタイトルを掲げた本書の新しい貢献は何だろうか。「自然体の経済」とは、自然の叡智を人間社会のシステムがまねることから始まる。「家族は、人体という生物個体の細胞にたとえられる…家族から自然や生産手段を奪うことは、いわば細胞から細胞質を抜き取るようなものであり、家族を…『干らびた細胞』にしてしまう」と本書は説いている。

「食べたいものは脳に聞くな、腸のなかの微生物に聴け。作物にどんな栄養素を与えたらよいかは、土壤に棲むミミズと微生物に聴け」という金言がある。自然から人が分離し、体から脳が分離・暴走することから社会のなかの暴力が始まったとすれば、人間と自然とが再統合をとげ、都市・工業を自然・農村・農業に埋め戻す「高度自然主義社会」、「ハイテク・アニミズム社会」を実現するにはどうしたらよいのか。その展望を探る文献として、本書を推薦したい。

本年度の後期に、本書を書かれた伊藤恵子さんと私とで「平和の経済学」を共同開講する。関心のある方は、この科目（経済学部）を聴講されることを薦めたい。なお竹富島の文化誌である『星砂の島』第12号（全国竹富島文化協会、2010年5月）は「岡部伊都子追悼」にあてられ、本学名誉教授の福田 晃さんが寄稿されている。また益田兼房・高田 昇・真下 厚教授など多くの立命館関係者が竹富島を研究フィールドとされている。いつの日か竹富島をテーマに「平和な社会の作り方」を探る特別展を開催できればいいなと願っている。

総来館者数70万人達成記念セレモニーを開催

2010年6月4日に達成

立命館大学国際平和ミュージアムでは、1992年の開設以来、通算来館者数が70万人を達成したことを記念し、2010年6月4日(金)、セレモニーを開催しました。この記念すべき区切りの来館者となったのは、三重県津市より修学旅行で訪れていた3つの小学校、津市立大井小学校、津市立誠之小学校、津市立波瀬小学校、合わせて105名の皆さんです。

ミュージアム1階ロビーに3校が揃われた午前11時45分より、ボランティアガイドの方々や関係者の見守り中、社会連携部宮下明大次長の司会で記念セレモニーが始まりました。

最初に、国際平和ミュージアムを代表して高杉巴彦館長より挨拶があり、引き続き、「ご来館に感謝申し上げますとともに、今後も平和学習に取り組まれ、平和創造のために一人ひとりに何ができるかを考えて努力されることを、心より願っております」と、3小学校の代表児童3名それぞれに来館70万人認定証と記念品が贈呈されました。

認定証授与の後、3小学校の代表児童により挨拶がなされ、その中の一人、津市立誠之小学校の印南妃奈さんは、「世界中が平和で争いがなくなってほしい。そのためには、身の回りの人を大切にしていきたい。今日、ここで学んだことをこれからの生活に生かしたい」と大きな声ではっきりと述べられました。

その後、記念セレモニーは、大きなくす玉がつるされた常設展示室入り口に場所を移して行われました。

司会者の掛け声とともに、3校の児童代表4名の手によってくす玉が割られると、中から「祝

来館70万人目おめでとう！」と書かれた垂れ幕と一緒に紙吹雪や風船が舞い、集まった人々から一斉に歓声が上がりました。



記念セレモニーに参加した小学生たち

記念セレモニー終了後は、ボランティアガイドの方々の展示解説を受けながら熱心にミュージアム内を見学していただきました。3小学校の皆さんが見学を終えて帰られる際、ひとりひとりに記念品のペーパーウエイトを手渡すと、早速中身を確認する児童もあり、皆さん笑顔でミュージアムを後にされました。

この記念セレモニーはマスコミの取材も受け、翌日の新聞には、くす玉を割って節目を祝った児童たちの写真とともにセレモニーの様子が掲載されました。

国際平和ミュージアムでは、過去にも下記のとおり、10万人ごとに来館団体が見学された際に記念セレモニーを行ってきました。この間毎年、年間総来館者数は5万人を超え、その半数以上が小・中学校、高校など400校以上の学校団体の見学者で占められています。

戦後65年目を迎えた今、あらためて戦争と平和の歴史を知り、平和創造のあり様を共に考える場とするため、今後もより魅力ある平和ミュージアムを目指し、関係者一同、いろいろなアイデアを駆使して邁進して参ります。

過去の記念セレモニー

●来館30万人達成記念セレモニー

2001年4月28日 広島市 府中市立南小学校
30万人記念認定証を贈呈

●来館40万人達成記念セレモニー

2003年11月18日 京都市 京都市立金閣小学校
40万人記念認定証、火の鳥パズルを贈呈

●来館50万人達成記念セレモニー

2006年6月27日 宮崎市 宮崎市立久峰中学校
50万人記念認定証、記念ストラップ・クリアファイルを贈呈

●来館60万人達成記念セレモニー

2008年7月16日 京都市 ヴィアトール学園洛星中学校
60万人記念認定証、記念写真立てを贈呈

カレル・チャペックの世界 —文芸を通した平和と人間性の追求—

会 期：2010年6月15日(火)～7月31日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

参観者：4,336名

後 援：チェコ共和国文化省、駐日チェコ共和国大使館、日本チェコ協会、チャペック・スツルシュ寄贈基金
京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局
KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社

協 力：株式会社村田製作所、北海道大学総合博物館、カトーレック株式会社
立命館大学理工学部ロボティクス学科

企画協力：カレル・チャペック記念館（チェコ）、株式会社イデッフ



公開記念講演会

「ロボットの科学と技術」

日 時：2010年7月3日(土) 13:30～15:00

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

講 師：川村貞夫（立命館大学理工学部ロボティクス学科教授・(社)日本ロボット学会副会長）

聴講者：42名

※会期中、立命館大学理工学部ロボティクス学科の協力のもと「最先端ロボット事例」を1階ロビーにてパネル展示で紹介しました。



会場の様子



関連展示の様子



講演会の様子

6月15日(火)から7月31日(土)の期間、2010年度特別展「カレル・チャペックの世界」を開催しました。

チェコを代表する作家カレル・チャペックは、文明批評家、SF作家、園芸家、愛犬家などの多彩な活躍で知られています。今回の展示では、チャペックの歩みを紹介するとともに、彼の遺品や、チャペックとともに活動し、イラストや装丁作家としても活躍した兄、ヨゼフ・チャペックによる装丁本、関連資料などをあわせて約86点展示し、カレル・チャペックの世界を紹介しました。

カレル・チャペックは現代SFの創始者であり、とくに有名なのが、初期の戯曲「R.U.R. ロッスムのユニヴァーサル・ロボット」です。科学文明の発達により創造された人造人間が人

間そのものを滅亡させるという、この近代文明批判の作品の中で新造語「ロボット」は世界中に広まりました。

また、チャペックの魅力は、趣味と関わる作品が多数あることでしょう。『園芸家の一年』はユーモア溢れるエッセイで、兄ヨゼフの挿絵とあわせて日本をはじめ世界中で愛読されています。他にも、写真、ペット、絨毯や民族音楽レコードの蒐集など、じつに多彩な趣味を愉しみ、いずれも素人の域を超えたものでした。

本展覧会では、このようなカレル・チャペックのさまざまな活動を紹介したパネルとともに、愛犬ダーシェンカの写真や数々の著作、兄ヨゼフ・チャペックの活動についてのパネル展示や「R.U.R.」のほか、ヨゼフが表紙デザインをした書籍などの展

示を行いました。あわせて、会場内に設けられた読書コーナーでは、『山椒魚戦争』、『いろいろな人たち』のほか、児童書の『お医者さんのながいながい話』など12種の書籍を自由に読んでいただくことができ、来館者の皆さまにも大変好評でした。

会期中の7月3日(土)には「ロボットの科学と技術」と題し、立命館大学理工学部ロボティクス学科教授の川村貞夫先生をお迎えして講演会を行いました。

まず始めにロボットを理解するための導入として、日本では一般的に科学技術という言葉を使用するが、本来、科学と技術は別物であり、科学とは本質を説明すること、技術とは目的を實現させることであると、違いを説明していただきました。

その後、世界的に見たロボットの歴史について、アニメも交えながらのお話は分かりやすく、終了後には「予備知識がなくても大変分かりやすかった」、「基本的な情報から説明してい

ただいてよく分かった」などの感想が寄せられました。

また、自身が研究されている生物型両腕搭載水中ロボット(作業を行う腕が人のように2本ついている)の実験・調査については、実際に琵琶湖にロボットを潜らせての実験の映像を使って説明していただき、参加者が熱心に耳を傾ける姿が見られました。

関連企画として、本展覧会会期中、ご講演をいただきました川村先生をはじめ、立命館大学理工学部ロボティクス学科のご協力のもと、「最先端のロボット事例」を1階ロビーにてパネル展示で紹介しました。

本展覧会では、日本から遠く離れた東欧の著名作家「カレル・チャペック」のさまざまな側面に触れることで、参観者の皆様に文芸を通した平和と人間性の追求について考える機会をもっていただけたのではないかと思います。

公開記念講演会の感想より

●ロボットの定義やロボットの歴史など基本的なところから知ることができてよかったです。ふだん身近すぎてロボットとは思わなかった家電製品など驚くこともありました。ロボットと人間がどう共生していくのか、雇用の面で難しいこともあるようですが、ロボットをうまく作って最終的には平和な世界になればな、と思いました。

(京都市 大学生 20代 女性)

●解りやすく未来が展望出来た。人間の叡智で平和に使われるよう希望したい。

(京都市 60代 女性)

●「日本の技術は先進です」ということは分かりましたが、他の国のロボット技術と比較しながら聞かせるのもっとわかりやすいと思います。

(京都市 大学生 20代 女性)

●ロボットの印象について、日本と西洋の違いが面白いです。

なぜロボットの分類は「生物」を基準としているのか。倫理学もロボット科学に大きな影響を与えたのではないのか。日本は欧米と違って、キリスト教の教義に拘らないのは確かですが、倫理観や思想も重要な働きがあると思う。ロボットは今の世界をどう変えたのか。潜水ロボットは、輻射がありますか。必ずしもいい影響ではないと思う。

(京都市 大学生 20代 女性)

●日常生活の中で多くの恩恵があることを改めて気づくことになった。

(奈良県 30代 女性)

●科学技術の意味を認識することが出来ました。ロボットの進化も大変面白いものでした。

(奈良県 60代)

見学者の感想より

●チェコのブルノで1年間生活をしました。街並みに見覚えがあり、初めて来たのにと不思議に思いました。しばらくして、小学生時代に読んだ本の中のチャペックのイラストと似ているからだと気付きました。

チャペック兄弟が平和な時代に生きられなかったことを大きな痛みと悲しみと共に、残念に思います。

(滋賀県 教育関係者 40代 女性)

●チャペックの人生と深く美しい言葉に触れて、私も心をただされるようでした。

(本学教職員 50代 女性)

●放送大学のテキスト「文学の愉しみ」に「世界文学」をテーマにした回があり、そこで初めて知りました。チェコといえば、プラスチラヴァの絵本コンクールと、ミュシャ・ドボルザークしか知らない遠くの世界でした。

(大阪府内 30代 女性)

●チャペックの遺品が来ているというので見に来ました。原稿などではなく、数も少なかったのでもっと残念ですが、チャペックの思想、足跡がパネルで系統立てて展示してあったのがよかったです。

(京都府 団体職員 40代女性)

●子どもたちにチャペック兄弟をもっと知って欲しい。慎ましく穏やかな暮らしの大切さ、それが戦争という暴力で踏みじられること、きな臭い空気の中、信念を曲げず訴える勇氣。自分自身も「時流」のパワーを感じ、時には一歩引いたり疑問を持ったりして生きていきたいものです。私の母(77歳)は小学校を卒業して「進学する」という希望が戦争で消えてしまいました。母は今も元気だし、戦争で身内が亡くなった訳ではありません。しかし、こういったささやかでつましい希望が叶わなくなるのも戦争の一面だと思います。

(和歌山県 派遣社員 40代 女性)



ロボットの实演・出前授業

日 時：2010年7月22日(木)

1回目／10：00～11：30、2回目／13：00～14：30

3回目／15：00～16：30

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

対 象：小学生以上、保護者

参加者：計415名

1回目／220名、2回目／120名、3回目／75名

プログラム：各回90分（毎回同じ内容）

- ・高杉巴彦 館長 あいさつ
- ・安斎育郎 名誉館長による平和のお話
- ・ムラタセイサク君®開発ストーリー
- ・ムラタセイサク君®、ムラタセイコちゃん®によるロボット実演
- ・平和へのメッセージ・まとめ



平和のお話の様子



ムラタセイサク君®の実演の様子

今年で5回目となる夏休み恒例の「夏休み親子特別企画2010」を開催しました。今年度の企画は、夏休みに親子で平和を考えるプログラムに加えて、特別展「カレル・チャペックの世界」と関連して、株式会社村田製作所のご協力のもと、「ロボットの实演・出前授業」を行いました。平日の朝10時から合計3回の企画には、子ども、大人合わせて415名の参加がありました。

高杉館長の挨拶にはじまり、続いて安斎名誉館長の「平和のお話」では、特技の手工品を交えて、世界には十分に食べ物を食べられなかったり、病気や戦争で元気に育つことができない子どもたちがたくさんいることを話していただきました。

また、今回のテーマである「ロボット」については、テレビアニメの鉄腕アトムやドラえもん、お掃除ロボットや、紛争地の地雷除去で活躍する支援ロボットがある一方で、戦争に使われる軍用ロボットのお話もありました。

ロボットの出前授業では、株式会社村田製作所の吉川さんより、ロボットの仕組みやムラタセイサク君®の開発、何度も何度も研究や実験を重ねてきた努力や苦労についてお話いただき、会場の子供たちには、「決してあきらめない気持ちが大事なので、皆さんも夢に向かって頑張ってください」と呼びかけられました。

その後実演に移り、子どもたちが待ちに待ったムラタセイサク君®、ムラタセイコちゃん®の登場となりました。一輪車に乗ったセイコちゃんがバランスをとりながら前後に移動を始めると、子どもたちから一斉に拍手や歓声があがりました。続いて、セイサク君がマジックスティックからの指令を受けて、狭い平均台の上を走ったり、首を縦や横に振っていろいろな表情を見せてくれました。最後に大技のS字走行では、セイサク君の胸についているセンサーが前方のカーブを確認しながら走行しているという説明に会場参加者全員が感心していました。

ロボットと平和という、一見つながりのないテーマに思えた今回の企画でしたが、私たちの生活を支援する、豊かにするなど、既にロボットとは大きな関わりを持っていることが分かりました。また、ロボットの中には平和に貢献

できるロボットもたくさんあり、あらためて平和について考えるきっかけになったのではないのでしょうか。

小学生の子どもたちから寄せられた平和へのメッセージ

- 世界の戦争がなくなってみんなが学校へ行けて楽しくくらしそうです。
- 自分を大事に（いのち）、戦争のない世界に。
- 平和なロボットを作り続けてください。
- 私は戦争が嫌いだから、私が大人になったら戦争をぶっ飛ばすくらいすごいロボットを作りたいと思いました。
- 便利なロボットを大事に人に役立つことで使ってほしいと思った。
- 戦争はとても恐ろしいから、ぼくがロボットを使うとしたら絶対に戦争には使いません。

参加した保護者の方々からの感想

- ロボットのことが良くわかったし、平和についても考える機会になった。
- とても興味深く、日本の技術力にすばらしさに驚きました。
- ただロボットだけではなく、平和ミュージアムでロボット展を開く意味とリンクさせていたのが良かったと思います。

～マンドリン演奏によるピースコンサート～

上記「ロボットの实演・出前授業」の合間を縫って、11時45分から12時30分まで、ミュージアムロビーにて、ランゲンドルフ・マンドリンオーケストラ（ドイツ）と立命館大学マンドリンクラブによるピースコンサートが開催されました。ランゲンドルフ・マンドリンオーケストラによる「カンタータ第78番より第2曲アリア」（J・S・バッハ作曲）や「アースソング」（マイケル・ジャクソン作曲）、立命館大学マンドリンクラブによる「崖の上のポニョ」（久石譲作曲）などの演奏が行なわれ、最後には「桜幻想曲」（鈴木静一作曲）が合同演奏され、聴衆者はマンドリン合奏の音に聞きほれていました。

職場体験受け入れ「生き方探究・チャレンジ体験」 京都市立上京中学校2年生3人を受け入れ

2010年6月8日(火)から11日(金)までの4日間、京都市立上京中学校の2年生3人が、「生き方探究・チャレンジ体験」(「生き方探究・チャレンジ体験」とは京都市立中学校で実施する「生きる力」を身につける社会体験活動)を行いました。

初日の火曜日は、兼清学芸員の解説とともにミュージアムの常設展を見学し、その後は毎日の各受付に入って行う入館案内補助の仕事を軸に、貸出用写真パネルや資料保存



貸出写真パネルの点検・清掃



寄贈資料のクリーニング処理

用具の清掃・整理、除湿機の温度点検作業、寄贈資料のクリーニング処理、マスコット「戦争ほうき」作成、大学生スタッフと一緒に展示企画チラシの近隣配布を行いました。

4日間の短い間でしたが、普段は接することのない様々なミュージアム運営業務に携わることで、一つ一つの仕事の大切さに気づいて頂けたのではないのでしょうか。今後も国際平和ミュージアムの他にも、博物館に興味を持ってこの体験を活かして欲しいと思います。



上京中学校生徒の皆さん

「アムネスティインターナショナル日本」NGOワークショップ開催 —サービスラーニングの学生受け入れを通して—

開催日時：2010年7月18日(日) 10:00~12:00
講師：アムネスティインターナショナル日本・理事 柴田重徳氏
場所：立命館大学衣笠キャンパス アカデメイア立命21 国際平和ミュージアム2階 ミュージアム会議室
対象：大学生、大学院生
参加者：19名
主催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画：国際関係学部君島東彦教授担当科目「立命館で平和を学ぶ」受講生 産業社会学部1回生 高木真由子、中川友実、東理世佳

●開催の様子

国際平和ミュージアム常設展示室「平和をもとめて」第2展示室NGOの部屋の活性化に取り組むこととなりました。国際関係学部君島先生担当の「立命館で平和を学ぶ」科目の受講生のうち「サービスラーニング」を選択した受講生が、受入団体において、定期試験に替えて20時間以上の労働をし、企画準備、運営実施を行うものです。

最初5月に受講生3人が集まり、活動の計画を立て、今後どのように進めていくのか、いつ活動をするのかなど、話し合いをするところから始まりました。受講生である学生3人は、出身地も広島、兵庫、大阪と異なり、授業でこの活動を選択することで知り合った学生たちです。

実際にミュージアムに展示してある12のNGO団体の活動を調べ、どのNGOの活動に興味・関心があるのか、それぞれの学生が選んだNGOを紹介しあい、意見交換をす

る中で、実際に依頼する団体の優先順位を決定して、進めて行きました。

依頼した団体から、講師派遣できる旨返答を頂いてからは、実際のワークショップ開催日に向けての準備に取り掛かりました。3人で協力して全ての事に取り組むことは、時間的な制約がある中、困難なことも沢山ありましたが、立派にやり遂げました。

ワークショップでは、①講師紹介、②アムネスティ活動紹介と質疑応答、③学生企画：参加型ディスカッション「良心の囚人について」、④実際に手紙を書いてみよう、⑤質疑応答、という内容で進めました。アムネスティで行っている活動のひとつ、「手紙やはがきを書いてみよう」ということで、実際に参加者の意思で、良心の囚人に宛て、はがきを書きました。はがきが実際に届くかどうか、分からない点が不安だという参加者もありましたが、でも役に立てる可能性があるのなら、自分たちの思いを書こう、と日本語か英語で自分たちのメッセージを書き、企画者が会場近くのポストへ参加者を案内し、各自で投函していただきました。



NGOワークショップ全体風景



講師柴田さんと3人の学生たち

特別企画 戦没画学生「戦場からの絵葉書」展

会 期：2010年5月26日(水)～7月7日(水)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム2階 ミニ企画展示室

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、一般財団法人 戦没画学生慰霊美術館「無言館」



「戦場からの絵葉書展」展示の様子



窪島館主と高杉館長の対談の様子

国際平和ミュージアム2階常設展にある「無言館／京都館 いのちの画室（アトリエ）」は、長野県上田市にある「無言館」の京都分館として、2005年の常設展リニューアルにともない開設しました。2010年度の今年は、その5年目にあたり、このたび開設5周年記念特別企画として、「戦場からの絵葉書」展を開催する運びとなりました。戦没画学生の絵葉書と、無言館本館の所蔵絵画（複製版）を展示しました。絵を描きたいと願いながらも、絵筆を銃に替えて出征し、戦場の露となった画学生たち。本展では、彼らが祖国の家族たちに送った軍事郵便を通じ、彼らの残した生きた証を紹介いたしました。

「御機嫌様 今日大きいハムが朝からおひるねです。満州風景のたりのたりかな。…」出だしからウィットに富んだ文章ではじまるのは、妹に宛てた画学生・大谷元氏の手紙。所属部隊で飼われている丸々と肥えたブタのスケッチ付きです。「其の後変った事はありませんか。私はいつも元気で御奉公致して居ますから御安心下さい。夏の暑い陽の下でシマの葉は午睡して居ます。…」(渡辺武)、「この顔に覚えがあるだらう。知らないのはカラスだけ。…其他異状なし。お腹を冷やさぬやう、風を引かぬやう由美子を頼むゾ。返信不用。」(吉田二三男)、「…繪具はまとめて充分大切にして下さい。油類も。石油、塩酸、アルコール等危ケンな品は万全を計って父に貰うなり、処分してもよい。…」(椎野修)

戦場に出た画学生たちは、遠く離れた家族の身を案じ、自分の居る土地のことや軍務にはげむ様子を綴りました。それらは、激化する戦局のなかにおいても、悲壮感や切迫した文調よりは、あくまで家族への気遣いや、気を許した相手にだけ見せる胸のうち、兵士たちの個性的なキャラクターなどが垣間見えます。

また、会期中の6月13日には、本展関連イベントとして無言館館主・窪島誠一郎氏をお迎えし、当館館長・高杉巴彦との対談「戦場からの絵葉書によせて」を開催しました。対談の中で窪島氏は、「塗り絵で例えると、国際平和ミュージアムは戦争を塗りこめた部分。無言館はそれ以外の部分を塗り込んでいる。塗られていない空白の部分の歴史がまだまだある」と立位置を説明し、戦没画学生たちについて、「彼らは絵が好きでたまらない。(戦地などの)究極の場所に立たされても喜々として絵筆を取っていた。描くことを求めている。悲壮な部分だけではなく、彼らの強さを感じ取って欲しい。」と語りました。また画学生の絵は、反戦のために描いたものではなく、戦争反対の声を上げていた訳でもない。彼らのモチーフは、あくまで近親者や身近な風景だったのです。純粋に絵を愛しキャンパスに向かっていて、そんな能天気ともいえる時間を愛することが、平和にもつながるのではないかという窪島氏の発言に来場者は聴き入っていました。

国際平和・人権連続セミナー ～平和の諸相を見る～

本ミュージアムでは、世界的な視野に立ち、平和を見つめる為の新たな試みとして昨年度より、国際平和・人権連続セミナーと題して、世界各国の知識人を招き、講演会を行っています。これまで、講演者として、駐日ドイツ大使のフォルカー・シュタンツェル氏や、米軍基地問題で揺れる沖縄県宜野湾市長、伊波洋一氏などをお招きし、それぞれが見てきた、また、今現在直面している平和への問題を語っていただきました。立命館大学の学生を中心に市民の方、他大学の学生など、多くの方の参加がありました。各回とも熱心な質疑応答が行われ、充実した講演会となりました。

本年度は秋にも本セミナーを企画しております。興味をお持ちの方は是非ご参加ください。

第1回 ベルリンの壁崩壊と人生の転換

～ある平和活動家の体験から～

日 時：2009年11月25日(水) 10：40～12：10
会 場：立命館大学衣笠キャンパス・創思館カンファレンスルーム

講 師：ペラ・ラングスフェルト

(著述家・元ドイツ連邦議会議員/CDU)

コーディネーター：出口雅久(立命館大学法学部教授)

参加人数：134名



第1回講演会の様子

第2回 ドイツにおける紛争解決と平和構築

日 時：2010年4月22日(木) 13：00～14：30
会 場：立命館大学衣笠キャンパス・創思館カンファレンスルーム

講 師：フォルカー・シュタンツェル氏(駐日ドイツ連邦共和国大使)

コーディネーター：出口雅久(立命館大学法学部教授)

参加人数：141名

第3回 宜野湾市長として、米軍再編と私たちの暮らしを振り返る

日 時：2010年5月29日(土) 13：00～14：30
会 場：立命館大学衣笠キャンパス・明学館94号
講 師：伊波洋一(宜野湾市長)

コーディネーター：池尾靖志(立命館大学非常勤講師)

立命館大学講義：「戦争の歴史と現在(GA)」との共同開催

参加人数：600名

第4回 記憶と戦争：イスラエルと日本における戦後史比較

日 時：2010年6月16日(水) 13：00～14：30
会 場：立命館大学衣笠キャンパス・研心館632号
講 師：ラン・ツウィゲンバーク氏

(ニューヨーク市立大学/国際交流基金フェロー)

コーディネーター：出口雅久(立命館大学法学部教授)

共 催：国際交流基金京都支部

参加人数：140名



第4回講演会の様子

パネル展「平和・文化・スポーツ創造に翔ばたく立命館人」 「わだつみ平和文庫」資料展示

会 期：2010年5月29日(土)～6月12日(土)13日間

ホームカミングデーは6月6日(日)に開催

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム

中野記念ホール

参観者：626名

本年は立命館大学が開学し110周年になります。そこで本学では6月6日に立命館大学卒業生に思い出のキャンパスに戻り、また地域の方にはキャンパスに足を運び、立命館を身近に感じていただく企画として、ホームカミングデーを行いました。国際平和ミュージアムではこの事業の関連企画として、政治家や自治体の首長、文化人、スポーツ選手として活躍されている立命館大学卒業生や関係者の皆様の平和への取り組みや文化、スポーツ発展の為に活動をパネル展示で紹介しました。このパネル展示をご覧頂き、立命館の教学理念「平和と民主主義」や「立命館憲章」が卒業生や関係者の皆様のご活躍により、社会のさまざまな場で実践されていることを来場者の皆様に知っていただけたのではないかと思います。

また、立命館大学の「平和」の象徴となっている、学徒出陣によって徴兵され、戦火に斃れた若人たちの苦悩を現した「わだつみ像」。この像が制作される原点となった戦没学徒兵の手記『きけわだつみのこえ』の原資料である、中村徳郎氏関係資料、徳郎氏の実弟で、手記の編者の中村克郎さんが集められた資料を展示する『わだつみ平和文庫』（山梨県塩山市）からの資料の一部の展示も併せて行いました。

ホームカミングデー当日は、242名が見学。同窓生と訪れた方、思い出を語られる方、ご家族と訪れられた方など多くの来館者がありました。また、見学をされる方の多くが当館の正面入り口にある「わだつみ像」の前で写真を撮影されたり、昔話に花を咲かせたりして、「わだつみ像」が立命館の平和の象徴として機能しているのだなぁと感慨深いものがありました。それぞれに改めて「立命館」を感じていただけたイベントとなったのではないのでしょうか。



会場の様子



たくさんの方々にご見学いただきました



「わだつみ平和文庫」の資料を見学する高校生たち

ボランティアガイドと「青い目の人形」

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 中野 恭子

退職してから立命館大学国際平和ミュージアムのボランティアガイドに参加しています。

戦後生まれの私はミュージアムに展示されている当時のことは経験していませんが、資料を読んだり、先輩の方々に教えてもらったり、各地の平和資料館を見学したり、戦跡巡りには進んで出かけたり、当時の建物やたくさん残っている碑を見て自分なりに学んできました。見学に来られた方々と写真や展示物を見ながら当時の様子を語り合えるようになってきました。小学生から「これは何」と質問をされ説明の後「どう思う」と対話にすることも楽しくなりました。今の小学生には言葉や文字だけではわかっているようで理解できない場面があります。どう言えば分ってもらえるかなと悩んだこともありました。

「平和な国・平和な世界とはどんな世界？」と、たくさんの写真や展示物を見て世界の平和を考えてもらえるお手伝いができたらと思っています。

私はガイドをしながら「青い目の人形」のことを調べています。「日米子ども友情親善使節」として日本に来た青い目の人形のことです。

この人形は1927年（昭和2年）アメリカ合衆国から日本の小学校や幼稚園に贈られました。なぜ贈られたかということと明治の末期からたくさんの日本人がアメリカに移民しました。ところがこのころ世界恐慌や経済状況でアメリカ人の失業者があふれていました。低賃金でよく働く日本人に対して反感が強まり、1924年「新移民法」が成立して日本の移民に対して排日の動きが大きくなりました。そのような中で親日家のシドニー・ルイス・ギューリック博士が人形を通して日米の親善を図ろうと全米に声をかけ、日本の実業家の渋沢栄一に協力を求めました。渋沢栄一も賛同して当時の外務省、文部省とで受け入れをしました。

「日米子ども友情親善使節」として日本に来た青い目の人形は大歓迎を受け日本の各地に贈られて行きました。

1941年に始まった太平洋戦争で人形の立場は大きく変わりました。鬼畜米英思想のもとで敵国人形となり、多くの人形が処分されてしまったのです。11,973

体贈られた人形は現在331体保存されていることが分かっています。私が保存の調査をした2005年は317体でした。この5年間に14体の人形が見つかっていきます。処分を免れた人形たちが次々と発見されていることは嬉しいことです。当時の校長先生が「人形には罪がない」とそっと隠されたり、預けられたりされたのでしょうか。戦時中をくぐりぬけてきた人形たちが今、平和を語る人形として大切にされています。京都では7体の人形が保存されています。京都市内に5体、舞鶴市に1体、福知山市に1体です。

新たな問題として小学校の合併が行われている中、保存された人形の行方も気になるところです。学校の解体や改築の時に新たに見つかったり、行方不明になったりすることも考えられます。子供たちの平和使節として贈られた人形です。多くの子供たちに見てほしい人形です。人形の歴史の中から当時の国民の様子を知り、今も平和のシンボルとして大事にされていることなどを語れたらいいなと思っています。児童や学生たちが見学に来る国際平和ミュージアムに何とか保存されればと願っているこのごろです。



青い目の人形「エイダ・ジェンビー・クノックス」
(京都市立清水小学校 蔵)

常設展示見学者の感想

今の時代は、平和で戦争なんかないけれど、昔は、国のとりあいで行なわれていて、たくさんの方が、なくなりました。もうこんな戦争がおこらないように、世界と、協力して、平和な国をきづきたいです。あらためて、戦争のおそろしさが分かりました。

(京都府 小学生 女性)

戦争はいらない！
みんなで仲よくしようヨォ！

(三重県 小学生 女性)

学校の授業より楽しくわかりやすく勉強できた。

(岐阜県 小学生 男性)

はじめ戦争をしようとした人がどうしてそう考えたのか、どうして最初から話し合うという意見がでなかったのかと思った。

15年もの歴史の中、人を失って悲しかったはずなのにと考えた。

15年もの間どれだけの人がなくなったのか。みんなが死んでしまったら、国を大切にしても、幸せにはなれないと思った。

国を守るため、国民をまきこむのは、おかしいと思った。国民も国に住んでいるけど一緒に人を殺させたり、自殺させるまでおいつめるのはまちがっていると思った。

(三重県 小学生 女性)

印象はとてもよかったです。けれど案内の人たちが、色々とおもしろく教えてくださったので知らないこともわかるようになりました。

(京都府 小学生 女性)

国際平和ミュージアムを立大が管理しているのは立大のほこりだと思った。

(京都府 大学生 男性)

PEACE！

写真や、物、人の説明など「戦争、難民や平和」のことについて考えさせられました。

1人1人、考えなきゃいけないこともあるし、今ここでも食べ物や生活に困っている人がいるというのがわかった、心がいたくなりました。

今、私たちに何ができるか、しっかり考えてたいです。

(神奈川県 中学生 女性)

とても現実的でよかったです。

一人の人間なんてどうてことないみたいな感じで人を殺しているけど今考えてみるととてもざんこくなことだと思います。しかも殺しかたも、毒ガス、核兵器、などしかもその赤ちゃんにまで被害があるからとても見ててつらくなりました。逆に人間はとてもちっぽけな生き物だけどみんなで力をあわせればとてもすごい力になると思いました。なぜかという、人間の力で武器を作り人間の力だけで国をつぶす、これはとてもすごいと思います。だけどこれはいけない方向に力を入れてると思いました。このくらいできるなら、国と国との力を合わせてとてもすばらしい未来をつくってほしいのになと思います。人間とはとてもちっぽけな生き物です。だけどそれは最大の力であり最大の恐怖でもあると知りました。この先未来は、前過去みたく戻ることはないと思うけど、でもこんな戦争がある未来はだれも望んでいないと思います。

(静岡県 中学生 男性)

ここでは一つ一つの真実がちゃんとのってて現在の人でも考えさせられる内容でとてもよかった。

今も歴史は動いていて、いつかここに居る自分も忘れられてしまう。

歴史は本当に大事だと思う

こういう考えさせられる場所があるという事はいい！！

(神奈川県 10代 男性)

戦争の厳しさなどがよく分かった。

(福井県 高校生 男性)

戦争の原因が奈辺にあるかを明確にしている点が当ミュージアムの原点かと思います。

日本の侵略戦争の本質を別けて、その戦争責任を問いつけていることは、日本における再侵略意図（自衛隊の海外出兵他）を暴露する意味で重要だと感じました。

1945年8月以後もアメリカの戦争責任の追及、（原爆投下をも含めて）をもっと鮮明にし、日米安保を問い糾すことが必要ではないでしょうか。

戦争の悲惨を再び起こさないためには、私たちはどうすべきかという問題提起も、一つのコーナーとして設ければ当ミュージアムの使命がよりいっそう明確となると思います。

この立派なミュージアムの存在をもっともっと広く知らしめる広報活動も大切かと思います。

今日は多く学び、反戦平和の私の意志を更に強くすることができました。当ミュージアムの発展を祈ります。

ありがとうございました。

(東京 70代以上 男性)

※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2009年4月
～2010年3月

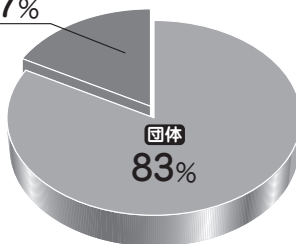
入館者状況

◎開館日数

293日

<有料団体・個人入館者状況>

個人 17%

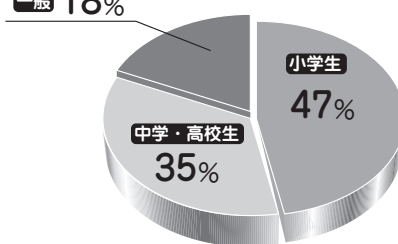


◎オープン後常設展入館者数累計

691,407名

<有料団体入館者数状況>

一般 18%



2009年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数計（名）
総入館者数		3,167	3,911	3,334	4,283	3,047	3,195	11,590	10,500	5,045	1,734	1,393	1,301	52,500
特別展	春季特別展 『岡部伊都子回顧展』	(4/28～5/31)												3,954
	秋季特別展 『世界報道写真展2009—WORLD PRESS PHOTO 2009—』													
	北海道（札幌三越）	(9/12～9/21)												4,615
	大分（立命館アジア太平洋大学）	(10/1～10/14)												1,949
	滋賀（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）	(10/17～11/1)												2,061
	京都（立命館大学衣笠キャンパス）	(11/3～11/29)												9,495
特別展	秋季特別展 『フィリピン・カオハガンのキルト展 ～持続可能な経済的自立のあゆみ～』	(10/1～10/31)												11,199
	小計													33,273
講演会	岡部伊都子回顧展（国際平和ミュージアム 1階ロビー）	(5/16)												
	記念講演会 窪島誠一郎氏×池田良則氏×尾形明子氏『岡部伊都子を語る』													261
	私たちに与える加藤周一 フォーラムin京都（朱雀キャンパスホール）	(6/20)												360
	映画上映会「アメリカばんざい」（衣笠キャンパス 以学館2号ホール）	(7/4)												204
	対談 藤本幸久監督×君島東彦教授（立命館大学国際関係学部教授）													
	下見見学会	(6日間・7/29～7/31、8/20、8/21、8/27)												88
	夏休み親子企画『「へいわ」ってなに?? 2009』	(8/1、8/2)												126
	世界報道写真展2009—WORLD PRESS PHOTO 2009—													
	北海道記念講演会 守分寿男氏『いのちについて』、林直光氏『紛争地域の現場から』	(9/13)												50
	衣笠公開記念講演会 石川文洋氏『戦場で見た“命(ぬち)どう宝”』	(11/11)												210
	フィリピン・カオハガンのキルト展（国際平和ミュージアム 1階ロビー）	(10/10)												86
	記念講演会 熊切圭介氏『南の島カオハガン島における持続可能な自立的発展のあゆみ』													
	パネルディスカッション 崎山克彦氏、吉川順子氏、小方昌彦氏、ジュディス・タリー氏、清水展氏													
	キルト展示作品解説 吉川順子氏													
	第1回国際平和・人権連続セミナー（衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム）	(11/25)												134
	ヴェラ・レングスフェルト氏『ベルリンの壁崩壊と人生の転換 ～ある平和活動家の体験から～』													
	映画上映会「台湾人生」（国際平和ミュージアム 中野記念ホール）	(12/9)												210
	対談 酒井充子監督×安斎育郎名誉館長													
	映画上映会「ワンショット・ワンキル」（衣笠キャンパス 以学館2号ホール）	(12/10)												35
	第19回京都漢字探検隊 漢字あそび大会（国際平和ミュージアム 中野記念ホール）	(3/27、3/28)												95
	小計													1,859

編集後記

この編集後記を書いている酷暑のさ中にも、意を決して一歩外に出れば、蟬しぐれとともに、公園に川べりに、子供たちの歓声が満ちあふれています。遠い昔に夏を迎える度に心に宿っていた感触がほのかによみがえり、それとともに無意識のうちに心を蔽っていた皮膜が剥がれ落ちるような気持ちになるのは私だけでしょうか。この歓声が聞こえなくなってしまうことを願わずにはいられません。

周知のように、1941年12月に始まったアジア・太平洋戦争は1945年8月15日に終結しました。

言葉に尽くせぬ犠牲を強いられた国民にとっては長い3年8ヶ月だったでしょう。しかし3年8ヶ月という時間は、大学生活で言えば、新入生が4回生の春に卒業するまでの間よりも短い期間であることも事実です。この短い期間の間に、国民は余りに多くのものを失いました。それが戦後65年間にわたる変貌の歩みの原点です。

酷暑とともに毎年訪れる広島・長崎の原爆記念日、終戦記念日に、少しでも心の皮膜を取り除き、この濃縮された3年8ヶ月の意味を考えることは出来ないでしょうか。

おかげさまで持ちまして当館は開館以来、6月4日に通算70万人目の来館者を迎えることができました。のべ人数とは言え、70万人と言えば京都市人口の約半分です。70万人の方々の記憶のどこかに当館の展示が刻まれていると思えば勇気がわいてきます。

また本号をもちまして、この『国際平和ミュージアムだより』も通巻50号となりました。これもひとえに読者の皆様のご支援ご鞭撻の賜です。僭越ですが、執筆、編集者一同になりかわりまして、お礼申し上げる次第です。

小関素明

ミュージアムインフォメーション

2010年度秋季特別展

「ピース☆コレクション」～資料でつづる平和ミュージアムの軌跡～

会 期／2010年10月26日(火)～12月18日(土)
9:30～16:30 (入館は16:00まで)
会 場／立命館大学国際平和ミュージアム
中野記念ホール
休館日／月曜日・11月4日(11月3日は開館)
11月24日(11月23日は開館)
参観料／大人400円(350円) 中・高生300円(250円)
小学生200円(150円)
上記()内は20名以上の団体料金です。
特別展の入館料で常設展も併せてご覧いただけます。

展示内容

世界で最初の平和博物館ができてから1世紀が経過し、現在では世界に100以上の平和博物館が存在します。平和博物館は、平和な社会を築くために忘れてはならない歴史を伝え、克服しなければならない課題について紹介をする役割を果たして来ました。戦争を体験した世代の人々が亡くなりつつある今日、こうした歴史を伝え、またその体験を引き継いで次の時代の平和について考える施設としての重要性が増しています。

本展ではこうした役割を果たすために、国際平和ミュージアムが収蔵する戦争と平和に関連する資料や、実物資料、博物館で使用される道具など、日々行っている活動内容を具体的に紹介します。どのようなモノが平和についての資料になるのか、資料にはどのような歴史があるのか、それをどのように引き出すのか、普段は常設展示されることがない、珍しい収蔵品を中心に、その役割を紹介致します。

また、博物館で使用される道具や実際の作業工程、働く人々の素顔や歴史への向かい方なども紹介し、来館者に、普段は接することがない「博物館の内側」を見ていただくことで、博物館活動と平和博物館独自の役割について知っていただく機会になればと考えます。

主 催／立命館大学国際平和ミュージアム
後 援／京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局
KBS 京都、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社
京都新聞社、FM79.7 京都三条ラジオカフェ

講演会のお知らせ

「どう使う？ 平和ミュージアム(仮)」

学校の授業の中でどのように平和ミュージアムを使うことができるか紹介します。

[日 時] 2010年11月20日(土)
[会 場] 国際平和ミュージアム2階 ミュージアム会議室
[講 師] 角田将士(立命館大学産業社会学部准教授)
高松智行(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校教諭)

※関西文化の日・11月13日(土)、14日(日)は入場無料です。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。



防火弾



凱旋クレヨン



図画「出征兵士を送る」

ミニ企画展

第58回ミニ企画展示 「明日も喋ろう ― 言論への暴力に抗して」

[会 期] 2010年9月14日(火)～10月8日(金)

[主 催] 朝日新聞大阪本社

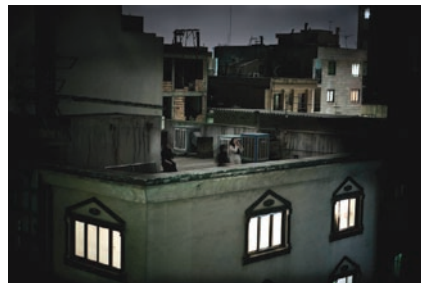
ミュージアムインフォメーション

特別展

世界報道写真展2010~WORLD PRESS PHOTO 2010~

開催趣旨

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約200点で構成した写真展で、今年で53回目を迎えます。4月、オランダ・アムステルダムを皮切りに世界45カ国100都市を巡回する展覧会です。いま、この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。時に命がけで撮影された報道写真を間近でご覧いただくことで、世界の現状を知り、いまだ平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。



〔世界報道写真大賞〕
ビエトロ・マストゥルツォ（イタリア／2009）
大統領選後の6月24日、テヘランの建物の屋上からイランの現体制への抗議の言葉を叫ぶ女性

【京都】

会 期：2010年9月22日（水）～10月16日（土）
※休館日：9/24（金）、9/27（月）、10/4（月）、10/12（火）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）

参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円

公開記念講演会：

日 時：10月5日（火）14：40～16：10 講 師：國森 康弘（フォトジャーナリスト）

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 以学館6号教室

テ ー マ：「世界の紛争と貧困を撮る」**聴講無料**

【滋賀】

会 期：2010年11月10日（水）～11月23日（火）（会期中無休）

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）

エポックホール

開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）

参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円

公開記念講演会：

日 時：11月16日（火）10：40～12：10 講 師：森住 卓（フォトジャーナリスト）

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス コーニングハウス I 304号教室

テ ー マ：「戦争は続いている～イラクの戦後と沖縄基地問題～」**聴講無料**

（京都・滋賀開催分）

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会

京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局

（衣笠キャンパス開催分）、KBS京都、滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会

大津市教育委員会、NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社

【大分】

会 期：2010年10月19日（火）～11月7日（日）（会期中無休）

会 場：立命館アジア太平洋大学（APU） 本部棟2階 コンベンションホール

開館時間：10時～17時（入館は16時30分まで）

参 観 料：大人500円、高校生以下無料

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会、大分県、別府市、大分県教育委員会

別府市教育委員会、NHK大分放送局

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社、別府商工会議所

社団法人別府青年会議所

協 力：大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

第18巻第1号（通巻50号） 2010年9月8日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>